

神奈川県考古学会

考古かながわ 第10号

1996年3月29日

真実の人間像を求めて

神奈川県考古学会副会長

寺田兼方

神奈川県全体を纏めた学会組織を望む声は予てより有りましたが、平成3年4月27日横浜市開港記念会館に於いて「神奈川県考古学会」が設立されて、今年で早くも5年目を迎えました。この間、会誌「考古論叢 神奈河」(1～4集)、会報「考古かながわ」(1～8号)も順調に刊行され、併せて恒例の「神奈川県遺跡調査・研究発表会」を始め、遺跡見学会、講演会、入門講座などの多彩な行事も頻繁に開催されてきました。このように充実した活動が積み重ねられている中で、今回図らずも副会長という大任を命ぜられました。力量不足ではありますが、その重責を痛感しながら、精一杯の努力を傾ける所存でありますので、宣敷く御支援の程をお願い申し上げます。

さて、今日では本会の会員数も⁵400名近くとなり、大変な大所帯に発展しました。従って、専門の研究者を始め、行政従事者、発掘従事者、愛好者、同好者など、それぞれの会員の立場が複雑に多様化しています。それは、会員一人一人の本会に対する要望、期待が多様化している

ということであります。役員の一員といたしましては、会員の皆様の御要望に可能な限り応えるように企画、運営を進めたいと考えておりますので、御遠慮されずに具体的な御要望をお寄せ下さるよう御願いを致します。

最後に、考古学の究極の目的が、「人間の歴史の復原」にあるとするならば、考古学の研究者は、先ず発掘調査によって「真実の人間像」を解明しなければなりません。この解明は、中央の研究者だけでは不可能な作業で、各地域での発掘調査による成果の地道な積み重ねがあって、初めて実現する大事業であります。一研究者が、生涯を通じて発掘調査し、研究することのできる仕事の量には、自ずと限界があり、地域の考古学に従事する者の一人として、折角本会のような組織が誕生したのでありますから、これを発掘調査や研究活動にも活用できるようにして、一人の人間に与えられた限られた時間をより有効に使うことができるようにしたいものと考えています。

郷土史を考古学より考察した石野瑛氏

いしのあきら
石野瑛（1889-1962）。福井丸岡の出身。明治44（1911）鎌倉の師範学校卒業。小学校、中学校教諭就任の頃より神奈川の郷土史研究に励む。大正3年（1914）沖縄県那覇の天妃小学校長として招かれる。勤務のかたわら、言語、風俗、習慣など民俗学的研究を続けられていた。『南島の自然と人』『琉球大観』を発表、沖縄郷土資料をまとめていた。横浜へ帰って後、向学意欲から早稲田大学史学科に入学。西村真次教授に師事した。在学中横浜市歴史編纂に加わって考古学的研究が進んだ。

大正11（1922）年谷川（大場）磐雄と武相考古学会を組織して『武相研究』を刊行した。「先史時代後期に於ける武蔵相模」、谷川の「武相石器時代の遺跡概念」などを収め、八幡一郎他同学の協力を得て考古研究の発表機関として発展した。次いで、『武相の古代文化』『武相考古』を著し、また横浜新聞開発に活躍した『吉田勘兵エ翁伝』を発表し、注目をうけた。郷土研究の史料、古記録保存、考古記録の整理の目的で、『武相叢書』を刊行した。

『亜墨理駕船渡来日記』『金川砂子』等6篇、『考古集録』4篇を発刊、貴重な古記録の復元、研究資料の紹介に努めた。

縄文、弥生、古墳時代から歴史時代に及ぶ関心と究明が続いた。赤星直忠の助言、協力を感謝していた。

小田原千代に廃寺址（8世紀）がある。飯泉勝福寺が伝統を継承している。これを弓削道鏡の創建と伝えられ、その宗教政治家としての事業に注目すべきことを発表した。郷土の記録や伝承も尊重したいと主張し、当時の軍官より厳しい警告をうてけて苦笑していた。

大磯住島崎藤村の書棚に石野の力作の一つで



（武相文化協会の学習で
鎌倉の史跡の説明をする石野会長）

ある『横浜近郊文化史』がおかれていた。明治初期の横浜特に港近く英一番附近の様子を叙述している藤村の作品『夜明け前』に引用されていると藤村学会員の発表があった。詳細な記述に注目されたことであろう。

神奈川県文化財保護委員としての活躍は続いたが、一方、生涯学習推進に先駆的な啓蒙につとめ、昭和7年（1927年）創立の武相文化協会は多勢の会員を集め、史跡、文化財の関心を高めることにつとめた。本来の初等、中等教育への熱意は燃え続けていた。昭和17年武相中学を設立。のち高等学校を併立した。神奈川における私学振興のため、協会を設立し、理事としてつとめ、私学審議委員就任して神奈川私学のために尽瘁し、私学経営とともに啓蒙的考古学者としての業績は大きいものがある。全県を歩いて各地の郷土史を集大成した『神奈川県大観』5冊は生涯の大著であった。最後の一冊湘東篇が病床に届けられたのであった。

（前神奈川県考古学会会長 日野一郎）

直良信夫と神奈川の考古学

最後の博物学者と評された直良信夫は、目に触れるもののすべてに強い関心を持ち、調べ、そして記録した。その範囲は、私どもの考古学ばかりでなく、人類学・古生物学・古植物学・地質学等々身近な自然の風物まで、非常に多岐にわたっている。そうした広範な研究領域のなかで、考古学は、直良の生涯を通じての研究対象であり、とくに、貝塚産自然遺物に対する研究はその重要課題であった。

直良は、10代後半に、岩倉鉄道学校に工業化学を学び、農商務省臨時窒素研究所で、ブッチャー氏法による空中窒素固定法の研究に従事したという経歴からも納得されるように、人文科学として成長しつつあった考古学に、自然科学的方法を積極的に導入しようとしたが、その結果が、貝塚産自然遺物への強い関心となったものであった。すでに、1924年の論考のながて、直良は、「貝塚を探訪する研究者は、比較的多いものにも拘らず、貝塚の包含する貝類を考査しようとする人々は、絶無といっていい位少ない。寧ろ遺物を発掘する上に於いて、貝塚の貝類は、

邪魔者扱いにされている。然し乍ら一步引き下がって、常に彼等の食膳を彩り、彼等の味欲を豊充した、夫等の貝類を透して、彼等の文化生活を視、或は包含分類によって貝塚分布の時代的推移を考察し、延いては退潮と陸地の構成を静考するとき、蓋し得るところ僅少ではないだらう」と宣揚しているのである（「貝類学的に観たる石器時代の東京附近」『考古学雑誌』14-13）。

貝類の研究から出発した直良は、1930年代に入ってから、貝塚産の自然遺物全般、つまり鳥・獣・魚骨や、泥炭層出土の植物性遺物にまで研究対象を拡大した。貝塚産自然遺物の大半を貝塚を形成した人々の食糧残滓とする認識に立ち、また、泥炭層出土の植物性遺物も参考にして、その食生活の復元も可能であり、さらに、遺跡をめぐる自然環境の復元さえも可能であると主張した。

こうした観点から、自然遺物の研究に邁進した直良は、各地の研究者から送付されてくる資料の分析に務め、また自らも資料を求めて貝塚の発掘にあたった。神奈川県内の貝塚でいえば、横浜市青ノ台貝塚や上ノ宮貝塚、藤沢市の西富貝塚、平塚市の五領ヶ台貝塚の調査報告は、いづれも調査担当者から依頼されてのものであるが、横浜市の下田下組西貝塚、藤沢市の丸山貝塚、横須賀市の茅山貝塚などは、西村正衛や金子浩昌氏等とともに発掘調査を試みたものである。泥炭層出土の植物性遺物では、あの下曾我遺跡出土の資料群を調査している。永塚光海端遺跡出土の植物性遺物の報告にも、ごく一部であるが、その成果が利用されている。

（参考文献『直良信夫と考古学研究』1990年）

（杉山博久）



ヤマネと遊ぶ先生

第19回神奈川県遺跡調査研究発表会開催される

第19回神奈川県遺跡調査研究発表会（本会主催）が、1995年9月23日川崎市中原市民館で開催されました。

今回は川崎市在住、在勤の会員・研究者を中心に運営委員会を組織して、神奈川県教育委員会と川崎市教育委員会の後援を得るとともに、開催準備や当日の運営には会員をはじめとする多くの皆様のご協力を頂いて実施しました。

開催当日はお彼岸の中日にもかかわらず、400人前後の方々にご参加頂くことができました。熱気あふれる会場の雰囲気につれて、運営委員会のメンバーも準備の苦勞がたちどころに報われる思いでありました。

さて、今回は旧石器時代から近世までの11件の調査・研究発表と記念講演がおこなわれました。

1. 相模原市横山5丁目遺跡（発表者：長澤邦夫氏）では旧石器時代から縄文時代の総合的な調査成果の発表がありました。2. 清川村宮ヶ瀬遺跡群北原遺跡（発表者：市川正史氏）では平安時代の舟形土壙墓や縄文時代中期後半の集落の変遷、旧石器時代の無文土器のを伴う槍先形尖頭器の製作址などが注目されます。

3. 横浜市阿久和宮腰遺跡第一次調査（発表者：中山良氏）では縄文時代中期中葉から終末にかけての集落の変遷過程が明らかされ、第二次調査の成果を加えた環状集落の全体像が期待される所です。4. 三浦市油壺遺跡（発表者：須田英一氏）では縄文時代の翡翠製の大珠を伴う柄鏡形住居址や活発な漁撈活動を窺わせる古墳時代の住居址などが興味をひくところ所です。5. 藤沢市若宮遺跡（発表者：継実氏）では縄文時代から平安時代以降までの連綿と続く砂丘遺跡の調査成果が発表されました。6. 伊勢原市第一東海自動車道No14遺跡（発表者：

宍戸信悟氏）では県下でも数少ない古墳群の調査成果として注目されます。7. 川崎市久本横穴墓群（発表者：後藤喜八郎氏）ではコケシ型人物像・切妻屋根の建物などが描かれた線刻画や蕨手状唐草文系の銀象嵌が施された鉄刀などが話題を呼びました。8. 平塚市構之内遺跡（発表者：上原正人氏）では8世紀の前半から10世紀後半にかけての官衛域集落の調査成果が報告されました。9. 国指定史跡永福寺跡（発表者：福田誠氏）では史跡整備の一環で実施した「苑地」「遺水」「堂舎背後」の調査成果が発表されました。10. 山北町河村城関連遺跡（発表者：安藤文一氏）では壕族居館址の調査成果が期待されます。11. 小田原市三の丸小学校内遺跡（発表者：小林義典氏）では小田原城域の歴史を解明するための貴重な調査報告がありました。

午後の発表に先立って県立旭高等学校の教諭・上本進二氏に今話題となっている地震の問題を豊富なスライドをもとに「神奈川県の『地震考古学』」と題して、興味深い記念講演を頂きました。

なお、詳しい内容につきましては、発表要旨が刊行されていますので、ご参照ください。



（服部隆博）

小田原城跡見学会に参加して

小田原市のシンボル小田原城も大通りを歩き天守閣を仰ぎ見ても何の変哲もない城下町だが、今回考古学会見学会に参加し、先生の説明を聞いて偉大なる文化遺産だと知りました。

当日3月17日(日)は生憎の雨天で参加者は十数名と小人数でしたが、説明していただいた小田原市教育委員会の諏訪順氏、大島慎一氏、山口剛志氏の先生方が御若いのによく勉強され、知識の豊富なのに驚きました。

見学コースも道標と説明書がありませんが、案内者あればこそ、三の丸土塁、幸田門跡と土塁がほぼ完全なかたちで残っている状況がよく理解できました。それにしても附近にお住まいの皆様、市役所の関係の方たちの文化遺跡の保存の熱意の高さに敬服しました。

説明によれば、城郭の広大さも今は見られる通りで、今復元中の銅門の石垣も文化財専門の大阪の石工を招いて、約二千六百個の石積みも忠実に行なわれた由です。銅門が完成されると又一つ新名所で話題になるでしょう。

考古学の展示室は発掘調査の遺物ですが、私は焼き物は苦手ですが、皆さんは熱心に研修されていました。

今後又見学会を企画されましたら、欠席がちの私ですが、一人でも多くの会員の出席を御願ひし、会幹部の方、先生方の御苦勞に対して厚く御礼申し上げます。(岩田與一)



会員の広場

本号より、会員の「声」を拾い上げる誌面、『会員の広場』を設けました。

今回、住所録作成時にお願いしました、会への要望の声を幾つか、ご紹介します。

■私の考古学の研究の中で、神奈川での調査で学んだことが、大きなウエイトを占めています。今後とも新鮮な情報を。(奥村恭史)

■発掘作業に参加してみたく、事前の指導等の企画をご一考下さい。(久保秋猛)

■行事予定などの連絡は早めをお願いします。又、県内の発掘調査の予定や現状、見学の可否など発表していただければ。(大籠容子)

■「遺跡発表会」の発表要旨及び「考古論叢神奈河」は会員に配布してほしい。(北川吉明)

■私は趣味で参加したもので、専門家の方にくらべ分からないことも多く、質問もあるのですが、遠慮してしまう。考古学の初歩の講習があると良いと思いますが。(窪田利夫)

■次世代を担う「子どもたち」を視野に入れた活動が展開されること期待。(中村隆)

■我々一般会員からしますと、先生方のご指導を得て、何かテーマを持って長期に亘ってでも研究～想像するようなグループを作って、2～3年に一度でも発表するようなことができれば…と考えたりします。(東家洋之助)

■『考古かながわ』誌上の「神奈川考古学再発見」良い企画と思います。願わくは会員がその遺跡を身近に感じ、訪れてみようと思った時の手引になるように場所・交通なども紹介したらいかがでしょうか。(西川修一)

●多くの方から戴いた会への要望は5月の総会の席上で事務局から、ご回答申し上げます。

皆様の「声」は会の運営に反映したいと思っておりますので、編集者まで投稿をお願いします。

埋蔵文化財の調査は、さまざまな問題をはらみつつも止めるわけにはいかない。そして考古学の研究は、常に発展しなければならない。埋蔵文化財調査の必要性和考古学の成果を分かりやすく説明する考古学博物館が、いま必要とされている。

神奈川は考古学研究において、常に必要な役割を果たしてきた。神奈川は、鎌倉幕府がおかれ、日本の中央としてあり、その考古学的研究は重要な成果をあげている。岩宿（旧石器・先石器）時代は、相模原台地では多数の遺跡が発見調査されている。縄文（縄紋・大森）時代の研究は、常に先進的位置を占めていた。弥生時代の調査は、その歴史的な位置づけについて重大な問題を提起している。奈良・平安時代の研究も最近では国府跡の解明に進んできた。江戸時代では小田原城跡だけでなく、村の調査も活発である。ただ、近代横浜の考古学的調査研究は緊急課題である。

不透明な時代、激動の現代を、真実根本から識るために、3万年前からの岩宿、縄文時代の原始を対象とする考古学の役割は重大である。考古学は原始、古代だけでなく、現代までを一つの方法で総括できる科学だ。考古学という方法は、モノを相手にして社会や文化を復元するものであり、基本的に相手にできない時代や地域は存在しない。環境も考古学するなど総合科学として成長してきた。

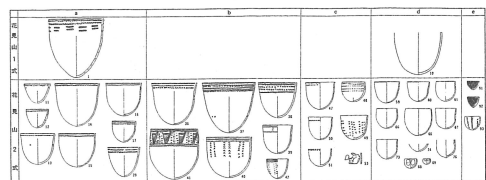
埋蔵文化財の調査による出土品は、既に膨大な量となっている。新しい方法、観点による新しい歴史像、考古像を展覧し、新しい歴史意識を醸成できるような総合的な考古学博物館が、いま、期待されている。（岡本孝之）

平成8年3月3日（日）神奈川県政総合センターホールで開催されました。当日は260席がほぼ満席で、大変盛況であり、企画した一人として胸をなでおろしています。

9時35分より白石浩之が「一縄文時代草創期研究の現状と課題」の問題提議の後坂本彰が「花見山式土器とその周辺」、桜井準也が「隆線文期の居住活動」村澤正弘「いわゆる隆線文土器以前様相」、諏訪間伸が「神奈川県西の現状」についてスライドをまじえて事例発表が行なわれました。そしてかながわの縄文時代の草創期の古環境と題しまして、柴田徹が「かながわにおける縄文草創期の使用石材」、午後から増渕和夫・上西登志子の「植生を中心とした縄文草創期の自然環境」についての事例の報告がありました。

その後、上記パネラーとコメンテーター（織笠昭、加藤勝仁、小林謙一、諏訪間順、鈴木次郎、鈴木保彦、戸田哲也）をまじえ、討論会が行なわれました。討論の内容は縄文時代草創期における隆線文土器期の遺跡、遺構、遺物そして古環境等多様な観点から行ない、最後に岡本勇会長の学史から熱くせまるメッセージが読み上げられ、有意なまとめのうちに終了いたしました。

なお、この講座のまとめについては本会から別途秋までに刊行する予定です。楽しみにしてください。（白石浩之）

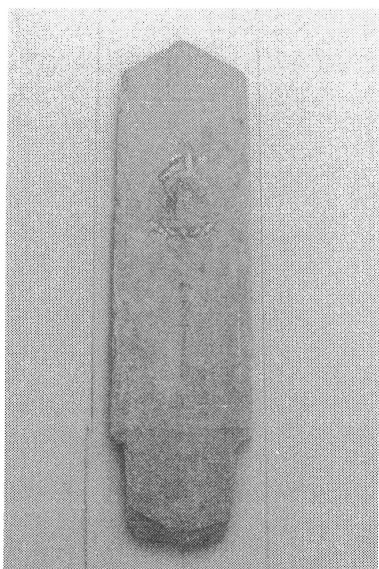


鎌倉市由比ヶ浜南遺跡出土の板碑

由比ヶ浜南遺跡の調査は地下駐車場建設に伴う事前調査として平成7年3月から約10,000㎡を対象に行われ、平成8年3月段階で半分の調査が終了する予定である。紹介する板碑は海拔3.5（地表下4.5）mで検出された東西に土塁を伴う礎石建物周辺から出土している。建物廃絶後の廃棄であろう。

板碑は緑泥片岩を用いた所謂武蔵型で、全長53cm、上部幅13.8cm、下部幅14cm、厚さ2.8cm、差し込み部長10cm。縦32.2cm、横11.3cmの枠内上部に梵字（キリーク）、下部中央に年号があり、枠線上部の2重線は無い。梵字、枠線、年号は漆を塗った上に金箔を貼られるが、年号、枠線には刻みが無い。年号は嘉元三年（1305）二月と判読されている。

本例は鎌倉における浜地という地域的な問題は別としても、鎌倉では貴重な記年銘を持つ出土例である。今後、近接した年代で検出されている1,000体を越える埋葬人骨や大規模な礎石建物との関係を明らかにすることで大きな成果が期待できる。（斉木秀雄）



琥珀 大珠

「琥珀」は硬度2前後の非常にやわらかい松柏科の植物から出るヤニの化石で、岩手県久慈市、千葉県銚子市などが産地として知られています。

平成3年度に行われた秦野市の東開戸遺跡の調査では琥珀を加工した装飾品である「大珠」が2点出土しました。いずれの琥珀大珠とも縄文時代中期の土壌内から出土しており、その大きさは国内では最大級のものです。

一つの大珠は、調査時に破損を受けましたが、卵型の深紅色をした良質の琥珀に加工を施してありました。その大きさは長径6cm、短径4.1cm、厚さ3.9cmをはかることができ、短軸・長軸方向に十字に連結された2本の孔がありました。なお、長軸方向では2度ずつの穿孔が、短軸方向では両方向からの穿孔が行われています。

また、他の一つは長径6.2cm、短径5.4cm、厚さ3.4cmをはかるやや不整形の楕円形で、長軸方向に貫通孔があります。この孔は2方向からの穿孔であり、また側面から斜め方向にも小さい孔があいており貫通孔につながっています。

これらの大珠は現在秦野市立桜土手古墳展示館の常設展「秦野の考古資料」に資料として展示されていますのでご覧ください。（霜出俊浩）



情報案内

特別展

「掘り出された川崎」川崎市市民ミュージアム
～8/24 ㊦月、祝翌

「北方騎馬民族の黄金マスク展」そごう美術館
6/13～7/14 ㊦第1、3、5火

「縄文文化誕生」横浜市歴史博物館
10/5～11/24 ㊦日(除休)、休翌(除休)

「内海のめぐみと三浦半島の人々」横須賀市人文博物館
7/16～10/30 ㊦月、祝翌、月末、左記重複日翌

「金沢文庫の中世神道資料」神奈川県立金沢文庫
8/22～10/6 ㊦月(除休)、休翌(除土日休)

「役人たちの中世」神奈川県立金沢文庫
10/10～12/1 ㊦月(除休)、休翌(除土日休)

見学会

「新編武蔵風土記稿を歩く」三浦半島の文化を考える会(有料) 4/14(日)10:00

「歴史探訪の会①」横須賀市人文博物館(要申込) 5/26(日)

講座等

横浜考古学講座「港北ニュータウン発掘20年の成果」横浜市歴史博物館(要申込、有料)
5/24～7/26(金)13:30

博物館教室「三浦半島の歴史」横須賀市人文博物館(要申込) 9/4～12/4(木)10:00

博物館教師区「三浦半島の考古学」横須賀市人文博物館(要申込) 9/5～12/19(木)10:00

講演会

五十嵐彰、砂田佳弘、大沼克彦他「考古学の新

たな動向」国士館大学鶴川校舎 5/6(木)10:00

研究発表会

横須賀考古学会発表会 横須賀市人文博物館
6/23(日)13:00

第20回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 茅ヶ崎市文化会館 9/23(日)秋分の日 9:30

お知らせ

①5月11日(土)13時より横浜開港記念会館(神奈川県庁前)で1996年度総会を開催いたします。当日は青山学院大学名誉教授の吉田章一郎先生の講演も予定されていますので、奮って参加ください。なお1996年度会費も当日受けつけています。

②平成8年度研究誌『考古論叢 神奈河』第6集について、執筆希望の方は8月末日まで研究誌担当の川口(神奈川県立博物館045-201-0926)までご連絡ください。

編集後記

桜の咲く季節になりました。10号は日野一郎先生、杉山博久先生より玉稿をいただき、誌面を充実させることができました。

会員各位の御意見をお待ちしています。

考古かながわ 第10号

発行 神奈川県考古学会
発行日 1996年3月29日
編集者 明石 新、大塚真弘、後藤喜八郎
白石浩之、松尾宣方、
事務局 東海大学文学部考古学研究室内
〒259-12 平塚市北金目1117
郵便振替 00240-9-71208
神奈川県考古学会
印刷所 有限会社長谷川印刷